



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	Gwendolen HarlethとIsabel Archer —そのBildungをめぐって—
Author(s)	木村成子
<i>Citation</i>	Shoin Literary Review, No.9 : 59-70
Issue Date	1975
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

Gwendolen Harleth と Isabel Archer

—その *Bildung* をめぐって—

木村成子

I

1876年出版された *Daniel Deronda* は George Eliot の他の作同様 Daniel plot と Gwendolen plot という double plot より成る作品だが、Eliot の弱点と長所が最も顕著な形で結合されたものとして評され、ほとんど一貫して Gwendolen plot のみが激賛されてきた。批評家として thematic な面で彼女を深く理解した一人である Henry James もその例にもれず、Gwendolen plot を高く評価している。彼は数多くの Eliot 批評を残したが、中でも1876年の *Daniel Deronda: A Conversation* は、彼の才気煥発振りを示すものとして有名である。これは Eliot を熱烈に賛美する Theodora, Eliot に不満を抱く Pulcheria, 相互の意見の流れを促進し正当な批評を行なう Constantius の三者が繰り広げる対話形式の *Daniel Deronda* 批評だが、ここで James の代弁者的立場にある Constantius は “It (=Gwendolen’s whole history) is the most intelligent thing in all George Eliot’s writing,... It is so deep, so true, so complete, it holds such a wealth of psychological detail, it is more than masterly.”^① と最高の賛辞を贈っている。James が寄せる Gwendolen plot へのこの強い称賛は、*Daniel Deronda* が出版当時一般に好評であったとはいえ、彼の興味とそれから受けた魅力が並々ならぬものであったことを感じさせる。

その4年後、1880年の春、James は *The Portrait of a Lady* (以下 *The Portrait* と略記) を書き始め、1881年夏脱稿している。*The Portrait* は、彼がそれ迄一貫して書き続けた the international situation のテーマ

を超え、人間の生の本質へと追求の次元を発展させたものであり、初期を締めくくる彼の代表作と評されている。

ところで、F. R. Leavis は、「人生への熱烈に誠実な根本姿勢」、「真の知性にとって第一の要件である深い真剣さ」に貫かれた作品として、*Daniel Deronda* と *The Portrait* を数ある英国小説の中から選び上げ、共に英国小説の「偉大な伝統」の要に属する真に意義ある作品として識別した。そして二作の批評的比較を行ない、*The Portrait* のテーマが Gwendolen plot の variation と呼んでもよい程異常なまでに似ているという事実に着目し、この事実は偶然では決してないこと、つまり James が Gwendolen の立つ situation に強く興味をひかれ、意図的に Gwendolen の story を hint として *The Portrait* を制作したのではないかと示唆している。^②

ここで簡単に二作の類似点を挙げると、(1)、未熟な少女が社会に出て種々の経験をするが、殊に結婚の試練によって精神成長を遂げ自己を確立してゆくという *Bildung* を扱う主題の類似、(2)、主要人物である Gwendolen と Isabel, Grandcourt と Osmond が、夫々、質の差よりもむしろ量の差を感じさせる程、資質に於て酷似していること、が先づ考えられるだろう。

だが主題や人物群という素材の近似性もさることながら、二作の共通の特色は、その倫理的色調に明瞭に感じられる。Eliot は多くの作品を書いたが、作品の中心をなす精神は終始一貫して不変である。つまり、視野の狭い自己中心的な人間が、種々の曲折を経て、自己を超えた広い Humanism の精神に目覚めていく過程こそ、彼女が常に追求した中心的テーマであった。このように主題が、若い主人公の精神発達過程を追うという点で、Eliot の殆ど全ての作品は *Bildungsroman* といえるが、この特長は又、James の諸作品にも該当する。彼の興味の中心も、種々の人間関係、種々の試練を経験することによって、ordinary な意味での幸せではなく、self-renunciation へと到るより広い精神に開眼していく主人公の精神成長過程であり、これは彼の長編小説に共通する特質ともなっている。そして Eliot も James も特に主人公の moral choice を興味の中心とし、主人公がそれを moment

として如何に自己を形成していくかを見る。Gwendolen も Isabel も根本的には自己の価値観に沿って自発的に結婚を選択するが、その結果の不幸は自己の行為が招いた当然の報いとして敢然と受け入れ耐えねばならない。しかしその苦悩の試練故に、古の昔から人間に課せられてきた生の哀しみに目覚めることが出来、他者愛へ、人間の連帯観へと到り着くことが出来ている。この heroine 達の生き方に見られる自由意志と determinism の相互作用のあり方には、自己の行為の責任を重んずる二作家の倫理観が強く感じられる。

James は英国作家の中では Eliot を最も尊敬したと言われ、彼女から多くのものを学び影響を受けているが、自身 cosmopolitan であった彼が目指したのは、一つのものに定着することではなく、古今東西の文化、精神を溶解し総合することであったといわれる。根底に 19C 後半の realism, moralism に根ざしてはいても、彼は独自の境地を開いている。The Portrait も前述のように種々の点で Gwendolen plot と密接な関係にあり、直接的な影響を受けていることは明確だが、にもかかわらず彼独自の theory を発展させた独創的な作品であることも否定出来ない事実である。例えば漠然とながら感じる二作の最も大きな差は、Isabel の肖像が Gwendolen のそれと比べて全体に非常に現実離れしたものであり、彼女の生き方が生々しきの欠けた造りもの的な匂いを感じさせる点ではないだろうか。両作家は共に一人の女性の生の認識に至る Bildung の過程を詳細な心理描写によって追求するが、夫々の approach はかなり異なっている。R. Williams は、社会的要素と心理的要素が融合一体化していた 19 世紀伝統小説に対し、James を始めとする 19 世紀末の小説に於ける心理小説と社会小説の分離を A Parting of the Ways と称して論じたが、Gwendolen plot と The Portrait とを比較した時、小説のこの変化を明瞭に見ることが出来る。つまり Gwendolen の心理は特定の時間的空間的背景のもとで辿られるが、Isabel に於ては彼女の心理に強く働きかける個別の社会内容から離れた普遍的な生の観念のもとで追求されていく。端的に言って、この点の違いが二作品を決定的に異なるものとし、Isabel の実在性を稀薄に

しているのではないかと思われる。Isabel がその中で自己形成をしていく世界は特殊性を昇華した普遍的な生である故に、人工的な不自然さをもっと同時に、生き生きとした血が通わない貧血症的なものになってしまったのではないだろうか。

II

二作の背景は、19世紀後半という時期的にも、又、イギリスを中心とした欧州一帯という場所的にも、ほぼ大差はない。しかし、背景がそれ独自の精神をもち、heroine の生き方にかかわり合いをもち得るものか否かの点では、二作は全く異なっている。即ち、Gwendolen の story には後期 Victoria 朝独自の風習、伝統、時代精神が強烈に存在し、倫理的選択を始めとする彼女の行動の基準となり時には規制でもあったに対し、Isabel の背後には確かに1871—77年、イギリスとイタリアを中心とする個別の背景が設定されるが、それは passive な域を出ない一般的な背景にすぎず、Isabel の生き方を左右する力はない。以下、この点を具体的に見ていきたい。

人生の出発点に立って広い将来を展望する Gwendolen と Isabel は共に生に於ける理想的態度として「自由」を挙げている。だが aspiration 助長のため、夫々が渴望した「自由」には非常に大きな差がある。つまり Gwendolen の求めたのは「…からの自由」という外部の自由であり、Isabel は内部の自由、「…への自由」を欲求したと言えよう。Gwendolen の世界に漲るのは、19世紀後半イギリス上流社会の種々の色調である。“doing what I like” を favorite key of life として勇敢に人生を意のままに切り開こうとする彼女は、母親をも含め自分の思いどおりに生きることのない当時の女性に苛立たしさを抱き、自分はそういう愚かな生き方をしないと心に決めている。彼女は当時の女性一般の現状を直視する。

“... We women can't go in search of adventures—to find out the North-West Passage or the source of the Nile, or to hunt tigers in the East. We must stay where we grow, or where the gardeners

like to transplant us. We are brought up like the flowers, to look as pretty as we can, and be dull without complaining...”^③

それは人形のようにただ見た目美しいだけの女を要求され、自由意志による積極的行為を抑圧されていた当時の女の実態への不満である。現状へのこの強い反発は、度々表現される彼女の formula である “not going to do as other women did” を生むと同時に、反動のように “being and doing remarkable” という aspiration をかきたてる。ところで当時の女性の実態に不満を抱いた Gwendolen がそこから自由になるために無意識のうちに心を傾けていったのは、準男爵の Grandcourt との結婚であった。Gwendolen にとって Grandcourt は彼に属する “the dignities, the luxuries, the power of doing a great deal of what she liked to do” 故に望ましい人であり、“being and doing remarkable” という抽象的な言葉で表現された彼女の aspiration は respectability を重んずる当時の典型的な立身出世の観念へと形をなしていった。ここで注目したいのは、他の女性のようにありたくないという彼女の formula には、因襲にまみれた現状から離れたいという一種の outsider 志向が感じられるが、その目指す窮極はひとときわ根深い伝統を担った貴族との結婚であったことであり、彼女の aspiration の原動力をなすものは時代精神に他ならなかったことである。「自由」を求めて貴族社会への道を選択する Gwendolen は明確に種々の圧力で締めつけられていた Victoria 時代の住人である。

しかも Eliot は、Gwendolen の Grandcourt 選択には彼女の視野の狭さのみならず、周囲の環境も働いたことを説明する。寛容で愛情深く種々の点で彼女を理解する叔父の Gascoigne にも、伝統と因襲で固められいつの間にかそれが当然となってしまった物の見方——人間の本質ではなく属性で人の価値を判断する俗物精神——が見られる。ここには Victoria 人の感受性が息づいている。

“Then, my dear Gwendolen, I have nothing further to say than this: you hold your fortune in your own hands—a fortune such as

rarely happens to a girl in your circumstances a fortune in fact which almost takes the question out of the range of mere personal feeling, and makes your acceptance of it a duty. If Providence offers you power and position—especially when unclogged by any conditions that are repugnant to you—your course is one of responsibility, into which caprice must not enter...”^④

叔父は Grandcourt の gossip を知りながら、彼との結婚を女性にとっての最高の名誉として、否、それ以上に道徳上の領域に迄延長した上で高尚なものとして勤めている。しかも Gascoigne は精神指導を天職とする教区牧師なのだ。このように Gwendolen の世界は、James 自身 *Daniel Deronda* 批評で “I delighted in its deep, rich English tone, in which so many notes seemed melted together” と称えているように、当時の上流社会の価値観、風習、生活様式が豊富に顕在し、時間的にも空間的にも独自の色調をもつ社会に囲まれていた。

これに対し、Isabel の世界はどうだろうか。“I like my liberty too much. If there’s anything in the world I’m fond of, it’s my personal independence” という彼女の求める自由は、Gwendolen が渴望した自由ではない。歴史のないアメリカで育った彼女には伝統や因襲に影響されることは皆無であり、彼女が何より求める自由とは生の自由な探求である。それ故 Grandcourt などその足下にも及ばぬ personage である Lord Warburton の求婚をも、貴族との結婚がもたらす可能性のある精神的束縛を理由に断わる。Gwendolen の世界で ordinary form of success とされた諸々の現世的栄華は Isabel にとってはかない力しかなく、彼女が信ずる人間の価値は attributes でも powers でもなく、character and wit に、つまり sublime soul を満足させる moral image に存在する。それ故彼女が選んだのは貧しい美術鑑定家 Osmond であり、彼の “the image of a quiet, clever, sensitive, distinguished man” に絶対的価値を見出したのだ。このように Isabel には、特定の時代や地域を反映したものではなく絶対的普遍的な精神が見られるが、総じて *The Portrait* の世界は個別性を超越し

た世界である。

Isabel 自身アメリカ人でありながらアメリカという地域性を感じさせない expatriate である。例えば彼女がまだアメリカにいた頃、姉や義兄は彼女のことを次のように評している。

“Isbel’s written in a foreign tongue. I can’t make her out. She ought to marry an Armenian or a Portuguese.”...

“... You know you’ve always thought Isabel rather foreign.”

“You want her (=Mrs. Touchett) to give her a little foreign sympathy, eh? Don’t you think she gets enough at home?”

“Well, she ought to go abroad,” said Mrs. Ludlow, “She’s just the person to go abroad.”^⑤

彼女は父親の教育方針により一種の liberal education を受けてきており、時には governess に時にはフランス人経営の学校にと委ねられ、一貫した教育を受けていない。“a larger way of looking at life” を望む父親に連れられて、彼女は14才迄に既に3度も渡欧している。

ところで Y. Winters は James の小説の典型的 pattern として、純粋な、それだけ切り離された道徳的気質 (=アメリカの風習から切り離されたアメリカの道徳意識) への感受性の教化 (=ヨーロッパの風習との接触の経験)^⑥ を指適している。だが Isabel の story にはアメリカの風習描写は見られないとしても、ヨーロッパの風習との contact があっただろうか。The Portrait の場合、James の他の international theme を扱う作品とは異なり、Isabel の Bildung は、アメリカの風習のみならず、感受性の教化の場であるヨーロッパの風習からも切り離されている。冒頭の Gardencourt の極めてイギリス的な afternoon tea の scene は別としても、ロンドン、パリ、ローマ、フローレンス、中近東という様々の生の探求の場は、彼女の生き方を深く揺り動かすような独自の歴史的社会的内容をもたない。例えばローマは彼女が人間の連帯観へと目覚める契機となった場所であり、彼女の Bildung にとって重要な土地である。だが Isabel にとってのロー

マは、個別の時代と地域としてのローマではなく、幾世紀も昔から続いた人類の歴史と膨大な記録としての普通の context に於て意義をもつローマであった。

She had long before this taken old Rome into her confidence, for in a world of ruins the ruin of her happiness seemed a less unnatural catastrophe. She rested her weariness upon things that had crumbled for centuries and yet still were upright; she dropped her secret sadness into the silence of lonely places, where its very modern quality detached itself and grew objective, so that as she sat in a sunwarmed angle on a winter's day, or stood in a mouldy church to which no one came, she could almost smile at it and think of its smallness. Small it was, in the large Roman record, and her haunting sense of the continuity of the human lot easily carried her from the less to the greater. She had become deeply, tenderly acquainted with Rome; it interfused and moderated her passion.^⑦

このように Isabel が生の意味を求めて歩むヨーロッパ各地は独自の colour が抜き取られた一般的な生の場所としての意味しかない。

しかも、個別的な時間的空間的描写の欠亡は背景に於てだけでなく、経験の場ヨーロッパで Isabel をとり囲み様々に教化する人物群に於ても同様で、彼等からは19世紀後半のヨーロッパの香りは放出されない。彼女がヨーロッパで接触する人々の中で純粋にヨーロッパ人は Warburton 一人であり、ほとんど全てが disamericanizing American であるのは偶然だろうか。彼女を生を探求へと案内する Touchett 家の人々, Madame Merle, Osmond, 或いは minor な意味で関りをもつ Edward Rosier, Gemini 伯爵夫人, その他パリで会うアメリカ人の群像 etc, 全て故国アメリカから長く離れアメリカ的なものを全く失っているが、かといってヨーロッパに没入しているとも言えない人種である。殊に heroine と重要な関係を持ち、物語の中心人物となる Madame Merle と Osmond はどこの国にも属さ

ぬ人間として描かれている。

Isabel had taken her at first as we have seen, for a French-woman ; but extended observation might have ranked her as a German—a German of high degree, perhaps an Austrian, a baroness, a countess, a princess. It would never have been supposed she had come into the world in Brooklyn...^⑧

You would have been much at a loss to determine his original clime and country ; he had none of the superficial signs that usually render the answer to this question an insipidly easy one. If he had English blood in his veins it had probably received some French or Italian commixture ; but he suggested, fine gold coin as he was, no stamp nor emblem of the common mintage that provides for general circulation ; he was the elegant complicated medal struck off for a special occasion.^⑨

The Portrait の世界はこのように *Bildung* の主体である Isabel も彼女をとり巻く人物群も特定の時間と空間をもつ社会と結びついてはいない。この個別性を抽出した普遍的世界故に、Isabel も Isabel の生き方も幻となってしまったのではないだろうか。例えば、Gwendolen と Isabel の story に於て決定的に異なる heroine が相遇する経済的試練の有無について見てみよう。Gwendolen は一家の破産という大きな悲劇を経験するが、その結果、生の過酷さと同時に自己の無力という現実初めて開眼しており、経済的試練は彼女の *Bildung* に大きな意義をもっていた。一方、Isabel には四方八方から押し寄せる経済的圧迫は全く見られない。それどころか 7 万ポンドの巨額の遺産を相続し、こと経済的要素に関しては、非現実的な程寛大な扱いを受けている。このように Isabel には Gwendolen の *Bildung* を大きく阻止し自由を奪う経済的圧迫が皆無であるばかりか逆に自由な人生探求の武器として豊かな経済力が惜しみなく与えられている。ところで 19 世紀後期イギリス社会は、Mammon によって支配された時代と言われ

る程で、金の力は物質界のみならず精神界をも左右する威力をもっていたと言われる。Gwendolen の story には、金銭が無力な少女の自己形成を大きく揺さぶる在様が、19世紀イギリス社会のもつ典型的な様相として現われているが、Isabel に於ては金力が彼女の自己確立を決定づけることはない。しかも Isabel だけでなく彼女をとり囲む多くの人物群が織りなす *The Portrait* の世界は、経済的不幸から遊離したものである。あり余る財産で優雅に暮す Warburton, Touchett 家の人々を始め、登場人物は金銭による苦悩から無縁の、生業をもたぬ有閑人種ばかりである。こうして経済的余裕のせいで現世的な煩わしさを、不幸から免れた結果、彼らの生への関心は必然的に social realism から隔絶した idealism へと邁進する。理想を追求する Isabel の epithet が余りにもしばしば romantic という語で表現されたり、又、“You seemed to me to be soaring far up in the blue—to be, soaring in the bright light, over the heads of men.” という Ralph の Isabel 観からも感じられるように、彼女は脱地上を思わせるものをもつ。James の最大の弱点とされる vulgarity の嫌悪は、*The Portrait* でも経済性の蒸発——特に個別の時代的地域的背景の裏付けのない——という形で表わされている。Isabel が現実の生から遊離した非常に超絶的な人間に見え、“The portrait of Isabel is the portrait of a mind rather than that of a person with physical form and body”^⑩ と評されるのも、*The Portrait* の個別的な社会的 content から離れた普遍的無時間的世界のせいではないだろうか。

III

以上見てきたように、二作の差は特定の社会的 content の有無にあった。Eliot が種々の要素から成り立つ社会の全的な姿の中で個人の moral evolution を追求するに反し、James は外的圧力から極力解放された条件に於てとらえている。そしてこのことは両作家の特質にもつながっている。

Eliot は個人と社会が如何に密接な関連をもつかを重視し、それらを個別に切り離しては考えない。それ故、彼女は人物同様、その背後の社会を

精細に描こうと努めている。例えば *Romola* では、15世紀末ルネッサンスのフローレンスの状況が種々な面から描かれ、その社会描写は story の大きな部分を占めている。以下の引用は *Romola* に関する彼女の説明である。

It is the habit of my imagination to strive after as full a vision of the medium in which a character moves as of the character itself. The psychological causes which prompted me to give such details of Florentine life and history as I have given, are precisely the same as those which determined me in giving the details of English village life in 'Silas Marner,' or the "Dodson" life, out of which were developed the destinies of poor Tom and Maggie.^⑩

このように詳しい社会描写は Eliot の特長であり「イギリス最大の社会歴史家の一人」^⑪と言われる理由でもある。しかし彼女の小説は決して社会小説に終らず、探求の中心はあくまで個人の心理であり、社会との接触によって生の認識に目覚め成長していく個人の心理的過程である。Gwendolen plot も archery, 舞踏会, Yacht 遊び等種々の行事や風習の中で、狭さから脱出しようとする彼女の心理が辿られる。こうして社会背景の描写と個人の心理という一見相入れないように思われる要素が Eliot の世界では一体となって融和している。Eliot のこの特長の背後には、「全体と部分は相関関係にあり、全体の正確な idea なしに部分の正確な idea をもつことは不可能だ」と言う H. Spencer の信じた実証主義的世界観が感じられる。

一方、James も heroine の内面的成長を見つめるが、彼が設定したのは幾つかの地上的要素を除外した世界——魂を追求するにはより純粋に透明な世界——であった。こうして James はひたすら真剣に個人の魂の追求に興味を集中するが、にもかかわらず読者にとって heroine の心理が不可解に思え共感を持ちたくとも持ち得ない場合が時としてあるのは、heroine の心理を裏づけする objective correlative としての社会的内容が欠如して

いる故ではないだろうか。両作家共、如何に生くべきかという普遍の問題を追求するが、Eliot が現実の種々の事実を見つめることによって一つの真理を立証していくような客観的な科学精神に貫かれているに対し、「何事であれ全てを語るのは不可能である。肝要なのは物語の統一だ」とする James は事実の照応よりも、感性と想像力によって直接真理をつかもうとするようである。社会的要素の欠如故に *The Portrait* が Gwendolen plot に劣ると簡単に断定出来ない。しかし、作品を *Bildungsroman* の見地から考えた場合、他との連帯を heroine の人間形成の窮極とする以上、個人と社会との連がりは不可欠のものである。個人と社会との contact が現実性の稀薄な普遍の世界でなされる Isabel の *Bildung* は、「真空の生」^⑧での *Bildung* でありそこに見出し得るのは Gwendolen の世界で感じられた生命をもった生ではなく幻の生なのである。

(注)

1. Henry James "Daniel Deronda: A Conversation", *George Eliot: The Critical Heritage*, ed. David Carro' (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p. 430.
2. F. R. Leavis *The Great Tradition* (Pelican Books, 1972), p. 104.
3. George Eliot, *Daniel Deronda* (London: Everyman's Library, 1969), p. 98
4. *Ibid.*, p. 104.
5. Henry James, *The Portrait of a Lady* (London: Oxford University Press, 1962), p. 30.
6. 行方昭夫編 「ヘンリー・ジェイムズの世界」北星堂, 1962, pp. 132-133.
7. *The Portrait of a Lady*, pp. 563-4.
8. *Ibid.*, p. 188.
9. *Ibid.*, pp. 246-247.
10. C. P. Kelley "The Early Development of Henry James", *Perspectives on James's The Portrait of a Lady*, ed. W. P. Stafford (New York University Press 1967), p. 59.
11. G. S. Haight, *The George Eliot Letters* (London: Oxford University Press, 1956), IV. 97.
12. 近藤いね子, 「小説と社会」研究社, 1972, p.87.
13. 川本静子, 宮崎考一, 「小説の世紀」開拓社, 1964, p.213.